

1. 進捗

佐伯胖の1970年代から1990年代にかけての文献を読み、以下のような考えの変遷を把握した段階。

佐伯胖の教育におけるコンピュータの使用に対する意見の変遷（3時代）

1970年代	CAIなどのコンピュータを用いた個別指導に対し肯定的
1985年～1992年	CAI批判、コンピュータ使用による負の側面を指摘
1992年以降	共同学習におけるコンピュータの使用を模索

一般的な教育工学の歴史

佐伯より遅れた形で、佐伯の意見の変遷と似たような展開がある。

（CAIなど→道具としての使用→協同学習での使用の流れ）

2. 困っている点

TAの方から、30年間の変遷を追うのは大変とのご指導をいただいた。それを受けて、卒論の方向性として二つの案を考えた。

1つ目：教育におけるコンピュータの道具化—佐伯胖の思想に着目して—

佐伯は1970年代では個別学習・CAIによる学習を支持していたが、1986年付近からCAI批判やコンピュータの負の側面を指摘し、コンピュータをあくまでも良い学びを実現するための道具だと強調するに至った点に焦点化する。佐伯は認知科学の立場から「わかる」とはということを考え、それをもとにコンピュータ教育のあり方を提言しているが、「わかる」とはどういうことかという点に着目して教育工学の歴史を研究したものはないため、そこを自分の研究のオリジナリティとしたい。

章構成案

- 第一章 1980年代の一般的な教育工学
- 第二章 佐伯胖の考える「わかる」とは
- 第三章 1980年代の佐伯胖の教育工学に対する考え

2つ目：佐伯胖の学びとコンピュータに関する思想の変遷

約30年間にわたる変遷を追う。この場合、TAの方のご指摘の通り、内容が浅くなってしまうことや、自分の最終的な結論をどこに持っていきのかが分からないという悩みがある。この案の場合も1つ目の案同様、「わかること」や「学び」とはという点に着目した教育工学の歴史について研究したい。

章構成案

- 第一章 1970年代：CAIなどのコンピュータを用いた個別指導に対し肯定的
- 第二章 1985年～1992年：CAI批判、コンピュータ使用による負の側面を指摘
- 第三章 1992年以降：共同学習におけるコンピュータの使用を模索

ご相談したいこと

- ・どちらの案で進めていくべきか
- ・章構成は適切か